
放課後の教室

律花

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

放課後の教室

【Nコード】

N8834W

【作者名】

律花

【あらすじ】

勉強はできるけれど、ちょっと冷めたところのある中学二年生の植本駿。ある日、放課後の教室で、偶然同じクラスの三森早希と会う。おとなしい彼女の「家に帰りたくない」という言葉が気になり、次第に存在を意識するようになるが……

1 いつもの光景

「おまえ、ほんと食うの遅いなあ。もつとぱっぱと食えないわけ？」
西村がいつものように、三森にちよつかいを出す。だけど、三森はなんの反応も示さない。視線さえ上げずに、のろのろと弁当のおかずを食べている。

班のほかのメンバーはとくに昼食を終えて、違う班のやつのところへ遊びに行ってしまった。

女つてことを差し引いても、三森はほんとうに食べるのが遅い。一口ひとくちがすくなくて、その上味わうみたいにゆっくりと咀嚼するから、なかなか弁当箱の中身が減らない。

西村が三森の食べ方をからかって、おかしそうに笑っている。席替えでいまの班になってから、すっかりおなじみの光景。三森が毎度口をつぐんだきり、なにも言い返さないから、西村はますます図に乗るんだろう。

僕は机に頬杖をついて、そんなふたりを横目に見ていた。

ちよつとは言い返せばいいのに、って頭の片隅で思う。だけど同時に、そういうことができないやつもいるってことは、ぼんやりとだけど理解している。

小学校のころから、クラスにひとりはいた。おとなしくて、なにを言われても黙ってうつむいているだけで、なんとなくこいつは馬鹿にしてもいい、みたいな雰囲気ができ上がっているやつ。

このクラスでは、三森がそういうポジションってことなんだろう。実際、西村と同じような、テンションが高くて頭の軽い男子に、よくからかわれている。

三森がやっと、弁当を全部食べ終わった。それとほとんど同時に、昼食時間の終わりを告げるチャイムが鳴って、クラスメイトはばらばらに自分の班へ戻っていった。

終礼が終わると、教室が一気に騒がしくなる。授業が全部終わった開放感のせいか、みんな昼休みの数割増しくらいの勢いで友達としゃべり出す。うしろの席の海斗に背中をつつかれて、僕は後ろを振り返った。

「なあなあ、塾の英語の宿題ってもうやった？」

「やった。っていうか、英語って今日じゃん。まだやってないわけ？」

別にめずらしくもないことだけど、ちょっと呆れてみせる。すると、机の上のスクールバッグに両腕を預けながら、

「午後の授業中、やるつもりだったのに寝ちゃってさあ」

梶谷の授業眠すぎ、子守唄たるあれ、と海斗がだるそうにぼやく。もう、この先にくる台詞は想像がついている。

「ってわけでさ、またノート見せてよ。帰り、ジューズおごるし」

やっぱり、案の定だ。僕ははいはい、と適当に声を返して立ち上がった。それからスクールバッグを肩にかける。教科書やノートの大半は机の中に残しているから、全然重くない。

「いいけど、とりあえず帰ろうよ。ノート家だし」

「さすが、前から思ってたけど駿っていいやつ」

調子のいいことを言いながら、海斗がぴょんと席を立つ。

それを確認して、僕はドアのほうに足を向けた。

2 帰り道

二車線の車道沿いに伸びる歩道を歩く。学校の先生の悪口とか、クラスのやつから聞いたうわさとかを、海斗と話しながら。

「そついや、聞いた？ 佐藤が山本に告ったつてよ」

「ほんとに？ で、どうだったの？」

「瞬殺、だつて。だよなー。佐藤も最初っから期待してなかっただろつし」

半分あきれて、半分同情しているような笑いを浮かべて、海斗が言う。

確かに、妥当な結果だつて思う。かわいくて話も面白い山本と、地味で動作のとろい佐藤じゃ、どう考えても釣り合わない。

「けど、なーんかくじけるよな。おれも告りたいけど、どうせふられんだろうなー」

急に海斗が落ち込んだ表情になって、深いため息をついた。

「神谷のこと？」

「そうそう。神谷つて正直、すげえかわいいし。うわーおれ、明らか釣り合いじゃね？」

海斗はひとりで話を完結させると、「あー」だか「うー」だか分らない声を上げて嘆いた。それから、いきなり僕に話題を振ってくる。

「駿は相変わらず、好きなやつとかいないわけ？」

「いないよ、そんなの」

隠しているわけじゃなくて、ほんとうにいなかった。

女つてなんか陰険なやつが多いし、変なところで怒ったりわめいたりするからややこしいし、わざわざ付き合いたいなんてまったく思わない。だから、「クラスの女子で、彼女にするなら誰がいいか」なんてくだらない話題で盛り上げられるクラスメイトの気持ちも、ぜ

んぜん分らない。

クリーニング屋の脇にある自販機で、僕たちは缶コーラを二本買った。もちろん、僕の分は海斗のおごりだ。

プルタブを引いて、中身を一気に半分くらい飲み干す。夏休みが開けて間もなく、まだまだ空気に暑さの名残がある時期。身体に冷たさが行き渡ってゆく感じが気持ちいい。

「本気で、女に興味ないわけ？ うそ言ってるねえ？」

そう言っつて、海斗がほとんど空になった缶を軽く振る。中でコーラのはねる音がした。

「ないつての。つていうか、うちの姉ちゃんと一日いっしょにいたら、女とか絶対無理って感じになるから」

「おまえの姉ちゃん、そんなひどいのかよ」

うんひどいよ、と笑いながら、姉ちゃんのことを脚色も込みで話す。

それを聞いて、海斗はおかしそうに笑い転げていた。

海斗と別れて住宅地を進み、家に着く。いつもどおり、スクールバッグから空になった弁当箱を取り出そうとして、僕は思わず舌打ちをした。

学校に、弁当箱を置き忘れてしまったらしい。

僕は大きいため息をついて、手ぶらで外に出た。そして、ついさつき通った道を、ふたたびたどり始めた。

3 放課後の教室

正門を抜けて校庭を突っ切り、僕は校舎に入った。

下駄箱でスニーカーをはきかえて、二階につづく階段をのぼる。みんな部活に行ったか帰宅したみたいで、誰ともすれ違わない。ざりざりと、上履きがコンクリを擦る音だけがひびく。

ドアを開け、教室に足を踏み入れる。

そのまま自分の席に向かおうとしたとき、窓際に立つうしろ姿が目に入って、僕は立ち止まった。

三森だ。

三森がゆっくりと、こつちを振り返る。そして、まるで僕の存在が本物かって確かめるみたいに、数回まばたきをする。

しばらく視線がぶつかって、先にそらしたのは僕のほうだった。

自分の席に向かい、机のフックにかかった弁当袋を取る。

「弁当箱、忘れちゃって」

無言で立ち去るのも微妙だから、ついでのように声をかけた。

三森がはっとしたように、弁当袋を持つ僕の手元を見る。すこし視線を落とし、どこかぼうつとした様子でつぶやく。

「……そうなんだ」

「三森はなにしてたの？　こんなところで」

僕の何気ない問いかけに、細い肩が怯えたようにはねた。そして、かすかに唇が動く。この場にふさわしい言葉を探しそこねたように口をつぐんで、それからやっと、消えてしまいそうな声で答えた。

「なにも、してない」

正直、すごく反応に困る返答だった。話題を膨らますことさえできやしない。まあ、三森にはそもそも会話をつづける気がないのかもしれないけど。

なにそれ、と愛想笑いを浮かべて、僕はきびすを返した。これ以

上、この気まずい空気に堪えられそうになかった。

ドアの引き手に手をのばしたそのとき、独り言のような声が耳に届いた。

「帰りたくなかったの」

思わず、僕は三森のほうを振り返った。三森が伏し目がちに、もう一度繰り返す。

「家に帰りたくなって……だから、残ってたの」

言葉の内容とは裏腹に、その表情は悲しそうでもさみしそうでもなかった。なんの感情も浮かんでいないように、僕には見えた。

僕は話し方を忘れたみたいに、ただその場に立ち尽くしていた。

三森のすぐうしろの窓は開け放たれていて、そこから流れ込む風が、肩下まである髪を揺らしていた。

4 家庭の事情？

塾に向かつて、自転車をこぐ。ペダルを踏みながら、頭に浮かぶのはなぜか、窓辺にたたずむ三森の姿だった。

自転車置き場に自転車を止めて、玄関ドアを開ける。すれ違った講師にあいさつして、夕方から開放されている自習室に入った。先にきて最後列に座っていた海斗が、僕に気づいて片手を振ってくる。

「駿、ノートノートっ」

僕が隣に腰を下ろすやいなや、海斗がそう催促してくる。わかっているよ、とかばんから英語のノートを出し、海斗に渡した。

「待ってる間に片付けときゃいいのに」

僕のつぶやきに、海斗がへへっと笑う。

「駿の解答のほうが確実じゃん。駿、超頭いいし」

まあ、そう言われて悪い気はしない。ちなみにこう見えて、海斗もそこそこ勉強ができるんだけど。

海斗がシャーペンを手に、ノートを写しはじめ。その様子を眺めているうち、またさっきの出来事が頭をかすめた。三森が、ぼつりと洩らした言葉。

家に帰りたくないって、なんでだろう。親とけんかでもしてるんだろうか。

「なあ、さっき偶然、三森と会ったんだけどさ」

海斗がシャーペンを動かしたまま、つづきを促す。

「そんで？」

「家に帰りたくないとか言ってたんだけど、なんでだと思う？」

僕がそうたずねると、海斗はがくつと大げさに机の上に突っ伏した。すぐにむくりと起き上がって、声を上げる。

「んなこと知るかつ。親とけんかでもしたんじゃないか？ それか、かてーのじじょー的な理由」

家庭の事情。

たぶん適当に言ったんだらうけど、その言葉にはなんだかリアリティがある気がした。

「三森ってなんか、わけありっぽくね？ 親に暴力振るわれてるとか、普通にありそうじゃん」

いつもおどおどしていて、ほとんど声を発しない三森は、僕たちとは異質な人間のように思えることがある。単におとなしいだけじゃなくて……まどつている雰囲気が違うっていうんだらうか。つかみどころのない感覚を、うまく言葉にできない。

ただ、海斗も僕と同じ印象をいだいていて、だから「わけありっぽい」なんて言い回しをしたんだってことは分かる。

「なに？ 三森のこと、気になるわけ？」

海斗がにやにやしなから言う。

「別に。なんとなく聞いてみただけ」

そっけなく返して、僕は腕時計を確認した。角張った数字は六時半を示していた。

三森は、もう家に帰ったんだらうか。

別に心配しているわけでも、あるのか分からない「家庭の事情」に首を突っ込みたいわけでもないけど、ほんのすこしだけ、心に引っかかった。

5 曇り空の夕暮れ

「駿、ちよつとスーパーで、卵と豆腐買ってきてくれない？」

日曜日、ソファに寝転がって漫画を読んでいたら、台所から母さんの声が飛んできた。

「えー……自分で行きゃいいのに」

「手が離せないのよ。今日の夕飯、なくてもいいの？」

そんなことを言われたら、行くしかない。

母さんからかばんを受け取って、僕はしぶしぶ家を出た。

いまにも雨の降り出しそうな空の下、財布と折りたたみ傘の入ったかばんを手に、駅前のスーパーへ向かう。だるいなあ、と心の中でぼやきながら。

スーパーに着いた僕は、陳列棚の間をぶらぶらと歩いて、頼まれていたものをプラスチックかごに入れていった。ついでにと、自分用のお菓子をその中に忍ばせてやったりもした。

そうして、買い物が終わらせて、レジへ向かう途中。

調味料が並ぶ棚の前に、僕は私服姿の三森を見つけた。

棚の前にしゃがみこんでいた三森は、小瓶をひとつ手に取ると、かごに入れて立ち上がった。それから歩き出そうとして、やっと僕に気づいたらしく、動かしかけていた足を止めた。

「買い物？」

いい話題が見つからなくて、なんだか当たり前な質問をしてしまう。三森はおずおずとうなずいて、植本くんも？ と聞き返してくる。うん、と僕が答えたのを最後に、会話が止まった。こんな状況、前にもなかったっけ？ 確か以前教室で会ったとき。

もう三森も買い物が終わったみたいだった。ここで別行動するのも変だし、自然とふたり揃ってレジに向かうことになる。

会計を済ませて商品を袋に詰め、僕たちはスーパーの外に出た。墨をにじませたみたいな空は、それでもかろうじて持ちこたえてくれている。

歩道をたどる僕の数歩うしろを、三森がついてくる。僕との距離をはかりかねているような、そんな感じ。帰る方向が同じなんだろうけど、ちよつと気まずい。

「それ、重くない？」

振り返り、三森の持っているポリ袋を目で示して、僕はたずねた。いっぱいになった袋は、ニリツルの飲料が入っていたりして、かなり重さがありそうだった。

「あつ……ううん、全然、大丈夫」

ふるふると、三森が何度もかぶりを振る。

そこまで必死に否定しなくても、とぼんやり思う。大きな袋は小柄な身体に不釣り合いで、あきらかに手に余っているように見えるんだけど。おまけにもう片一方の手も、水色の傘でふさがっている。「持つよ」

なにも持っていない右手を、僕は差し出した。

「いつ、いいよ……いつも自分で持つてるから、慣れてるし……」

「そんないつも、ひとりで買い物してるわけ？」

気になってたずねると、三森は恥ずかしそうにうつむいて、肩を縮めた。

「うち、親がふたりとも働いてて、忙しいから……よく、私が買い物してるの」

そばを通る車の走行音に紛れて、小さく、ほんとう小さくつぶやかれた声に、僕は海斗との会話を思い出していた。

かてーのじじょーってやつ？

でも、親が共働きしてるやつなんて、友達にもたくさんいるし。別にめずらしい話でもない。

「とにかく、慣れてても重いものは重いだろつ。貸せよ」

僕は強引に、三森の持っている袋を奪い取った。三森は驚いたよ

うに目を見開いて、なにか言おうとして……ぎゅっと唇を噛んだ。

「……ありがとう」

その声はかすかに震えていて、薄い影の落ちた顔は、いまにも泣き出しそうに見えた。

6 気になる存在

スーパーで会って以来、なんとなく三森のことが気になるようになった。西村にからかわれているところを見ても、以前ならなんとも思わなかったのに、最近はいい海斗としゃべっているふりをしながら、耳をそばだててしまう。

ある日、社会科のグループ発表に向けて、班ごとにリーダーを決める機会があった。まあ、そんなものは当然誰もやりたがらないわけで、みんなでお互いの反応をうかがう状態になってしまった。

「三森でいいんじゃない？ どうせ、リーダーとかやったことねえだろ？」

西村が笑いながら言ったのは、そんなときだった。

班全員の目が、三森のほうを向いた。どう考えても、三森は場を取り仕切ったり、大勢の前で発表をしたりするには向いていないみんな分かっていながら、口を挟まなかった。ただ、顔を見合わせ苦笑いするだけ。

なにか言つて、自分に白羽の矢が立つのがいやだったからだ。

三森はじつとつつむいていた。自分には意見する資格なんてないつて、思っているみたいだった。

「おれがやるよ」

いてもたつてももられない気分になって、僕は名乗りを挙げた。

リーダーなんて面倒なこと、やりたくなかったはずなのに。なんで自分から率先して飛び込んでしまったのか、分からない。

場はそれでスムーズにまとまった。みんながほっとしたような笑顔で、僕に感謝してくる中、三森だけが相変わらず黙り込んでいた。とても申し訳なさそうに目を伏せて、まるで痛みをこらえるみたい

月末になると席替えがあつて、三森とはすこし席が離れてしまつた。でも、教室の後方にある新しい席からは、教室全体を見通すことができた。教室の中程の席にいる三森のことを、僕は授業中や休み時間、ふとした瞬間に見ていた。

三森は基本的にいつもひとりだったけれど、たまに山本とか柏木とか、クラスでも特別ひとなつっこいやつに話しかけられていた。

三森が誰かとしゃべっているところを目にするたび、僕はもどかしさに近い感覚をいだいていた。

なにを話してるんだろう？

耳を澄ませても距離が邪魔して、三森の小さな声は聞き取れない。ここから見えるのはうしろ姿だけで、顔さえ分からない。

笑っているんだろうか。それとも、緊張して、こわばった表情をしているんだろうか。

想像してみたところで、それを知るすべなんて、僕は持ち合わせていなかった。早希ちゃん、って親しげに話しかけることのできるあの女子よりも、僕と三森の距離は遠かった。

「駿、なにぼーつとしてんだよ。帰ろうぜ」

海斗の声に促されて、僕は教室のドアに向かった。

途中で一度、自分の席を振り返る。すこし迷ったあと、なにも気づかなかつたふりをして、ふたたび足を進めた。

7 ふたたび教室で

家に着いた僕は、適当な頃合いを見計らってまた家を出た。車道沿いの道を進んで、学校に着く。

校舎に入って階段をのぼり、教室のドアを開ける。どれくらい期待をかけていたのか、自分でも分からない。ただ、はっきりしているのは、三森があの日と同じ、誰もいない教室の窓辺にたたずんでいたことだった。

三森が振り返る。こっちを見つめる目が、とまどいに揺れている。僕はゆっくり自分の席に向かうと、机の横にかかった弁当袋を手にとった。

「また、弁当忘れた」

そう言って苦笑いすると、不安げだった三森の表情がゆるんだ気がした。

「三森は、今日も残ってたんだ」

「……うん」

「家に帰りたくなくて？」

今度は息を殺したような沈黙が返ってくる。

三森の様子をうかがったあと、僕は思い切って、ずっと気になっていたことをたずねた。

「三森ってさあ、親と仲悪いの？」

三森が小さく息を飲む。そして、僕からぎこちなく目をそらして、弱々しい口調で答えた。

「そんなこと……ないよ。けんかとかも、全然しないし」

相変わらず口数がすくなくて、ひとを拒絶するような態度を見せる三森。

僕は言うべき言葉を失って、黙り込んだ。

分からなくなっていた。

わざわざ、忘れ物したふりなんかして、僕はなにをしたかったんだろつ。

窓の外から聞こえてくる運動部のかけ声が、場違いな感じで耳にひびく。この前の放課後よりも涼しい風が、三森の髪をなびかせる。ふいに三森がこつちに視線を戻し、そしてやっと、「質問への回答」じゃない言葉を僕に向けた。

「ずっと言えなかったけど……この間はありがとう。リーダー、やっつけてくれ」

「いいよ、あんなの。っていうか西村のあれ、あきらかに嫌がらせじゃん」

先日のリーダー決めの際の出来事を思い出して、あきれながら言う。

すると、三森はなにも言わずにうつむいてしまった。あまり触れられたくないことだったのかもしれない。やっちゃったかな、とちよつと後悔する。

「まあ、適当に聞き流しとけばいいよ。あんなのに付き合ってたら、時間の無駄だし」

くだらない、って一笑するように、僕はそう言った。

「ん……そうなのかな」

三森が小さく首をかしげて、自分に言い聞かせるみたいにつぶやく。

こんなときにふさわしいのがどんな表情なのか、僕には分からない。ただ、ここでいかにもって感じのまじめな顔をするのは、なんだか違う気がする。

「そうそう。別に三森が悪いことしたわけじゃないんだしさ」

だから僕は、適当っぽくて、軽い感じの笑みをつくった。それが三森の目に、どう映ったのかは分からないけれど。

「……うん」

三森がこくんと小さくうなずく。

それから、その唇がかすかに動いて、だけど、やっぱり声にはな

らなくて

代わりに大粒の涙が、白い頬を伝い落ちた。

8 孤独とさみしさ

あ、と三森が小さく声を洩らす。自分が泣いていることに気づいて、自分でも驚いたっていうふうには。

三森はあわてて目元に手をやった。ぼろぼろとこぼれる涙を、強引にぬぐう。

僕はなにがなんだか分からなくて、ただ黙ってその様子を見ていた。張り詰めていた糸が切れたみたいで、そんな泣き方だと思って思った。

「なんで」

やつのことで、僕はのどから声を絞り出した。

「なんで、泣くんだよ」

「……分かんない」

そう答えて、三森は顔を上げた。もう涙は止まっていたけれど、こすった目の下が赤くなっていた。

「あのね、私……ほんとは、買い物なんか行きたくない。晩ご飯だつて、つくりたくない。三人分つくっても、食べるときはいつもひとり……誰も食べてくなくて、朝、そのまま残ってることもあって」

堰を切ったみたいに三森が言う。また泣き出しそうになるのを、ぎりぎりのところで踏みとどまっている感じで。

「ひとりで家にいるのが、怖い。お父さんもお母さんも、いつも帰りが遅くて……私のこと、忘れちゃったんじゃないかって思っちゃって、すごく怖い」

さっきまで泣いていたせいで、すこし鼻にかかった声。まだ目じりもちよつと濡れている。

正直、僕には三森の気持ちがよく分からなかった。買い物なんてせいぜい、母さんに頼まれたときに嫌々行くくらいだし、晩ご飯を

自分でつくったことだつて一度もないし。ひとりでいる怖さなんてものも、全然感じたことがない。

だから、その場しのぎな慰めの言葉はかけたくなかった。それはまるで、上っ面だけのきれいごとを押し付けるおとなみたいで、ひどく偽善者っぽく思えた。

「事情は、知らないけど」

三森がはっと、僕の顔を見る。窓の外、三森のうしろに広がる空はまだ明るいけれど、教室に差し込む光は昏間と違って、ほんのすこし橙色を帯びている。

「ここにいたつて、なにも変わらなくなる？」

今度は、返事がない。それが答えだつていうように口をつぐんでから、三森はひとりごとみたいに言った。

「私……ときどき、自分がどこにいればいいのか、分からなくなる」

ひと呼吸ぶんの間のあと、言葉を継ぐ。

「どこにいても、不安になるの。ここから私がいなくなっても、誰も気にしないんじゃないかって」

そのとき、教室のドアが派手な音を立てて開いた。体操服姿の西村が中に入ってきて、僕と三森の姿を認めるなり、大げさな声を上げる。

「うわっ、植本と三森じゃん」

そして大股で教室の後方にあるロッカーに向かい、ペットボトルホルダーを手に取った。

「ごめんごめん、邪魔したかなー」

にやにや笑いながら、品定めするような目を僕たちに向ける西村。その目つきが不快で、僕は思わず西村を睨みつけた。西村は素知らぬふりできびすを返して、教室を出ていった。

ドアの向こうに消える西村の背中を見届けてから、三森に視線を戻す。

呆然とドアのほうを見つめる三森の目には、はっきりと怯えの色が浮かんでいた。

静けさばかり際立つ教室で、僕はじっと三森の言葉を待った。
だけど、三森はその日、最後まで口を閉ざしたままだった。

9 冷たい言葉

翌朝学校に行くと、教室の後ろで友達とさわいでいた西村が、僕に意味深な視線を向けてきた。なにも言わなくても、顔に浮かんだ薄笑いがその意味を物語っていた。

僕はそれを無視して、さっさと自分の席に着いた。おはよ、と僕のところに向かってきた海斗に、あいさつを返す。

塾の宿題のことや、昨日見たテレビ番組のことを海斗としゃべって、西村から気をそらそうと努める。だけど、無駄にでかいその声は、いやでも耳に入ってきた。

植本と三森が昨日、教室でデートしててさー。マジで？ 放課後？ そうそ。なんか見つめあって、おれ、どうしようかと思っただもん。

西村の言葉に、大きな笑い声上がる。うっわ、マジかよ！ ねえわー。

好きな芸能人の話をしていた海斗のテンションが、目に見えて落ちてゆく。笑いがぎこちなくなつて、西村たちのほづをちらちらと見る。僕に気を遣ってなにも言わないけれど、西村たちの話に意識を奪われているのが丸分かりだった。

「なに馬鹿みたいに、はしゃいでんだか」

動揺を押し隠し、苦笑して僕がそうつぶやいたとき、また西村たちから笑い声が弾けた。

うわ、無理無理無理っ。三森はありえねーだろ！ 趣味わりー。奥歯を噛みしめて、僕はうしろを振り返った。ちょうどこっちを見ていた西村と、見事に目が合った。いやらしく笑って、西村は僕に言った。

「なあ、昨日三森となにやってたんだよ、植本」

腹の底から熱いものが込み上げてくるのを、僕は感じた。ぎゃあ

ぎゃあ、くだらない話をして笑うしか脳のない連中。

身体の芯に震えを感じながら、僕はそれでも、ここでどんな態度を取れば自分を守れるのか、計算できる程度には冷静だったんだと思う。

「なにつて、忘れ物取りにいったとき、偶然会っただけだけど？」
どうでもいって感じを装って答える。ここでむきになったら、西村たちを喜ばせるだけだって、自分に言い聞かせながら。

「それだけで、あんなやつと仲良いことになるわけないし」
発した声が、耳を伝って頭にひびく。その冷たさに僕はとまどっていた。

自分の落とした言葉が、くつきりとした輪郭を残して、宙にとどまっているみたいに感じられた。

期待していた反応を得られなくて、西村たちは一気に興ざめしたみたいだった。そのあともしばらくは、僕と三森をネタにして騒いでいたけれど、さっきほどの勢いはなかった。先生が教室に入ってくるころには、すっかり話題は移り変わっていた。

そこまできてやっと、僕は自分がしたことの意味に気がついた。

最悪だ。

後悔がぐるぐると身体をかき混ぜて、胸を圧迫する。

僕はのろのろと、机から教科書とノートを出した。

板書を機械的にノートに写す。チョークを持った先生の手の動きに、視線を集中させる。

教室の中段に座っている、三森のうしろ姿を直視する勇氣なんて、僕にはなかった。

「あんなやつ」

あのときの僕の声は、三森に聞こえていたんだろうか。

考えても仕方ないのに、頭から消し去ることができなくて、胸がぎゅっとする。もう五日も経ったのに、自分が発した言葉の冷たい感触を思い出してしまふ。もし、僕の声が聞こえていたとしたら……三森は、なにを思っただろう。

僕は黒板から、三森のほうに視線をずらした。板書を写している三森の背中を、視界のすみでとらえる。

あの日から、三森とは一度も話をしていない。移動教室なんかのちよっとした機会に、何度か目が合ったけれど、いたたまれなくて僕のほうからそらしてしまった。だから、三森がどんな顔で僕を見ているのかさえ、分からない。

休み時間、トイレから教室に戻る途中、三森が向こうから歩いてくるのが見えた。

逃げることなんて、できやしなかった。

すこしうつつむいて、不自然に足が速くならないように意識しながら、まっすぐ歩く。

廊下にいるのは、他のクラスの男子が数人。窓の外には淀んだ空と、昨日から降りつづくうつつとうしい小雨。

すれ違う直前、男子の話し声とかすかな雨音に交じって、三森の小さな声が耳に届いた。

「じゅめんね」

僕は思わず振り返る。

小さな背中。歩き去ってゆく三森は、僕のほうなんて振り返らない。

言葉の意味が染み透るのに、それほど時間はかからなかった。

三森はきつと、全部聞いていたんだ。三森とのかつをあげつらつて、西村が僕をからかったことも。僕が保身を優先させて、三森を見捨てたことも。

「……なんでだよ」

廊下をゆつくりと歩きながら、心の中で、三森に問いかける。

悪いこともしてないのに、なんで謝るんだよ。

三森の姿が頭をよぎる。怯えたような表情。重いポリ袋を提げて歩く、細い身体。涙に濡れた瞳。

僕は目を伏せて、こぶしを握りしめた。

謝らなきゃいけないのは、僕のほうなのに。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8834w/>

放課後の教室

2011年10月12日07時59分発行